



観光ハブ

カジノ、国際会議、医療… 不断の開発が外国人を呼ぶ

人口の2倍以上もの外国人が毎年訪れる観光大国に押し上げた観光振興施策の中身とは――。

あだち まさひろ
足達 雅英

(自治体国際化協会シンガポール事務所長)

Bloomberg

建

国当時の1965年、わずか10万人程度に過ぎなかった国外からシンガポールへの来訪者数は、2010年には過去最高の1160万人に達し、11年には1300万人に達しようという勢いである。10年の観光収入は188億シンガポールドル(Sドル、1兆1280億円)で、観光産業は国内総生産の6%を越えた。

これまでも来訪者数は世界経済の成長を背景に一貫して上昇傾向にはあったものの、07年まで1000万人という目標には届かず、1人当たりの消費金額の減少にも直面していた。だが、10年になると不況からの回復や2つの総合リゾートの開発などを背景に状況は一転、観光収入は前年から49%の大幅増となり、来訪者数とともに過去最高を記録している(図1)。

東京23区とほぼ同じ面積の国土で、歴史・自然遺産などの観光資源も少なかったこの都市国家が、アジアでも有数の観光大国となったのは、早くから観光産業の将来性に着目し、国を挙げて振興策に取り組んできたからだ。

観光業を経済成長の牽引役とするため、1964年、シンガポール政府観光局(STB)が設立された。現在世界24カ所に事務所や駐在員を置き、機能別に分かれた7グループ

が、観光戦略を総合的に実施している。STBは、05年に今後10年の観光振興計画「ツーリズム2015」を策定。従来の欧米や日本に加え、中国、インドといった新興国からの観光客獲得へターゲットを広げ、15年までに来訪者1700万人、観光収入300億Sドルを目指す(図2)。

観光業界には20億Sドルもの観光開発基金を設け、インフラ整備、大規模イベント、旅行商品の開発等を強力に支援する。以下、具体的な開発策を見てみよう。

ラスベガスも上回る勢い

08年のシンガポール・フライヤー(世界最大級の観覧車)完成、同年のF1レース(世界初の市街地ナイトレース)初開催、カジノを含む2つの総合リゾート開発に続き、12年6月開園予定のガーデンズ・バイ・ザ・ベイ(総面積101haの植物園)、同年上半期開業予定のリバー・サファリ(「川」がテーマの動物園で、世界各地の大河をボートで巡りつつパンダやホッキョクグマを含む動植物を

ボートで観察するという設定)など、今後も新たな開発計画が目白押しだ。カジノを含めた総合リゾートは、シンガポール観光再生の切り札として、多くの議論を経て導入された。特長は、1カ所にエンターテインメント施設が集まり、家族連れや友人同士、ビジネスから富裕層のニーズまで満たすことができる間口の広さにある。開発に巨額の費用を要するが、カジノの10年間の独占ライセンスを付与し、新規参入をさせないなどの工夫により、開発・運営主体を民間企業に委ねることでクリアした。

その1つ、10年4月27日にオープンした「マリーナ・ベイ・サンズ(MBS)」は、米企業「ラスベガス・サンズ」グループによる東南アジア初の高級総合リゾート。世界最大級のカジノ、博物館、シアター、ショッピングモール、コンベンション施設等がある。3棟からなるホテルタワーは、地上200層にある屋上同士が空中庭園でつながれ、長さ150メートルプールを備える。空中に浮かぶ巨大な船を思わせる斬新なデザインで、シンガポールの新しいランドマークとなっている。

もう1つは、マレーシア企業「ゲンティン」グループにより、セントーサ島の北側に開発されている総合リゾート「リゾート・ワールド・セントーサ(RWS)」。ファミリー層



がメーンターゲットだ。東南アジア初の「ユニバーサル・スタジオ・シンガポール (USS)」は、24のアトラクションのうち、18が世界初またはシンガポール独自の内容。カジノは10年2月に高級ホテルのクロックフォードタワーに開設。すでにオープンした海洋博物館に加え、12年には水上ヴィラを含むリゾートホテル2軒、高級スパ、世界最大規模の水族館、アトラクション等が開業し、一大娯楽施設が誕生する。

アジアのカジノ産業の売上高が成長を続ける中、MBSとRWSの11年の売上高合計は61億米ドル(約4750億円)に達する見込みである。12年は69億米ドルでラスベガスを上回る、と予想されている。

MICE産業の振興

各種会議、展示会といったMICE (Meeting, Incentive, Convention, Exhibition) 関連の誘致にも積極的だ。

MICE産業の振興のため、STBは専門組織を設置。国内外のイベントを誘致する際の優遇制度を06年に導入した。09年2月には、MICE

Eを含む観光産業全般を支援の対象としたBOOST (Building Opportunities to Strengthen Tourism) 制度に統合され、優遇措置はより多様となった。イベント開催費用への助成といった財政的な支援から、外国からの招待客や講演者に対する出入国手続きの簡易化といった非財政的な支援だ。この制度は「シンガポール航空ショー」「バイオメディカル・アジア」「シンガポール国際水週間」等、約600のイベントやビジネスで活用されている。

10年の国際会議都市開催ランキングをみると、ベルギーの国際団体連合のデータでは、都市別で世界1位(東京は7位)、アムステルダムは国際会議協会のデータでは5位(日本

は国別で7位、東京は都市別で27位)など、世界トップクラスとなっている。

医療を観光資源に

近年、安価な医療費や高い医療技術を求め、外国で治療を受けつつ、観光もする医療観光(メディカルツーリズム)が注目を集めている。シンガポールの医療制度は評価が高く、世界保健機関(WHO)が00年に発表した「医療制度ランキング」ではアジアで1位、世界でも6位だ。

この質の高い医療を「観光資源」として振興するため、03年には「Singapore Medicine」という複数の行政機関による連携事業が打ち出

されている。シンガポール経済開発庁(EDB)、シンガポール国際企業庁(IE Singapore)、STBが連携し、「アジアの医療ハブ」とすべく各種政策を実施する。

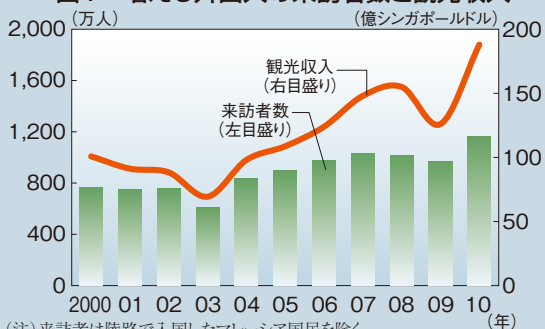
07年の医療観光者は約40万人。STBは、12年に年間100万人、観光収入30億米ドルを目指す。

シンガポールには、東南アジアの中心にある地理的な優位性に加え、緑豊かな都市環境、空港等の交通インフラ、一流ホテルの集積、英語の普及、多民族・多文化の共生、治安の良さ、といった建国以来の努力によって築き上げた優位性がある。

シンガポールの強みは、その地位に安住しないことだ。中国、インド、ASEAN(東南アジア諸国連合)諸国からの海外旅行者の増加、世界各国の観光開発の進展を常ににらみ、新しい戦略目標を掲げる。大胆な投資ときめ細かなサービスを次々と生み出し、世界経済が曲がり角を迎えるなか、来訪者の大幅な増加を図っている。

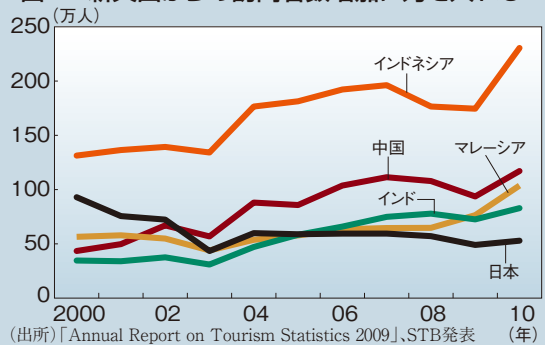
そのためには建国以来禁止されていたカジノについてもタブー視せず、厳格な管理の下、その経済的なメリットを追求しつつ都市の魅力向上に活用している。従来の枠組みを超えた柔軟な発想と決断、実行力はその戦略のベースとなっている。

図1 増える外国人の来訪者数と観光収入



(注) 来訪者は陸路で入国したマレーシア国民を除く
(出所)「Annual Report on Tourism Statistics 2009」、STB発表
資料より筆者作成

図2 新興国からの訪問者数増加に力を入れる



(出所)「Annual Report on Tourism Statistics 2009」、STB発表
資料より筆者作成